

【文芸時評】

作品は時の流れに耐えうるか

横尾和博

いきなりだが、昭和文学、戦後文学と聞いてみなさんの思い浮かぶ作家や作品名を挙げていただきたい。現在の自分の年齢や体験、過去の読書遍歴などを総合的に考え、たとえば昭和文学の代表は太宰治、戦後文学では大岡昇平と答える方や、大江健三郎、安部公房、古井由吉、高橋和巳などを挙げる方も多いかと思う。こう書くのは今年二〇一〇年、あの太平洋戦争敗戦から実に六十五年が経ち、一九六〇年の歴史的な安保闘争から五十年が経った、との現実があるからだ。中村真一郎はかつて椎名麟三の作品解説で「文学作品というものは、その発表された時代の空気の流れ去ったあとで、はじめて真の姿を現わす」と書いた。名言である。時代の流れの中で生まれた作品は、時間と歴史の風化に耐えられるのだろうか。私はいつもドストエフスキーを想起するのだが。さて同人雑誌の書き手の中には戦争体験や、六〇年の安保前後の青春時代を書く人が多い。自分の体験を書いているればたぶん七十歳代から八十歳代の方とお見受けする。体験を素材に作品を書くことはすばらしい。しかし、戦争や安保前後の青春ものを書いたときに、若い書き手や読者にテーマや背景の時代状況が伝わるのかと危惧を抱く。伝えることは文学の役割のひとつである。伝えなくてよいのなら、単なる自己満足、自慰の世界に浸るしかない。あえて言えば、「文学とは伝達」であり、一人ひとりが考えなければならぬ使命がそこにある。社会主義リアリズムのようなイデオロギーや宗教を持ち込むことは使命とは言わない。だから戦中や戦後の焼け跡、そして五〇年代から六〇年代の青春物語（同じく七〇年代前後の学生叛乱物語も同様）は、かけがえのないものではあるとしても、伝達するべき何かがなければならぬ。それを埴谷雄高は「精神のリレイ」と名づけた。精神のリレイこそ文学や哲学の役割であろう。

逆の意味で一九七〇年生まれの古処誠二（四十歳）が書く沖縄や南東の島で繰り広げられた戦争物の筆は鋭い。『接近』『七月七日』『遮断』『線』などをぜひ高齢の書き手に読んでほしい。彼は資料と想像力だけで悲惨な戦争の人間模様を描く。彼に戦争を知らない世代だからといって批判めいたことはなにも言えぬ。そのように若い世代が高齢者の体験した時代に思いを巡らし作品を書くこと、そして逆に高齢者が自分史の延長のような回顧譚を書くだけではなく「いま、ここ」を語り得る作品を発表することが大切だ。もちろん時代や情況に背を向ける私小説的な書き手にも問われることだ。

人間存在が不可解であることは諸兄姉には先刻ご承知のことだと思うが、不可解な人間をどのように観るかが作家たるものの資質であり、個性の発揮できる場である。

さて一月の芥川賞は受賞作なし。私は候補作のなかでも松尾スズキ「老人賭博」を推す。理由はドタバタ喜劇風の作品ながら人生を賭博に喩えて考えさせられる「何か」がある。また友人の作家、村中豊が第二冊目の短篇集をだした。一九七〇年代後半を舞台にした『新宿夜想曲』である。

また世は幕末、維新ブームで、これはテレビの影響が大きいですが、昨年の劇的な政権交代による人々の心の底流にある意識が背景でもある。出版業界も龍馬ブームが起きている。この際司馬遼太郎を読み直してみるのもよいかもれない。幕末ものでは半藤一利の『それからの海舟』『幕末史』がお薦めである。歴史から学ぶことの重要性は言うまでもない。

明治維新、敗戦により日本人の精神史が断絶していることへの深い認識なしに、精神のリーを語ることはできない。

ここからは同人誌について順不同で私見を述べる。本稿は一月末に筆を執っているので、その時点で編集部から私に届いたものが対象。今回は冊数が多かった。

「孤帆」15号の塚田遼「大人になるってどういうこと？」は、三十歳になった男性が十五歳のときの自分と向き合い、思春期を通過することの諧謔を緊張感あふれる文体で書く。ストーリーに特別な意味はないが、若い書き手特有の横溢する力がある。それは同誌のほかの書き手、淘山竜子「夜、コンビニの前、雨」、北村順子「返却」、奥端秀彰「吠える」の諸作品も同様で、途上の生が輝きながら銀の杯からこぼれるような印象を持った。塚田が一步抜け出ているのは、分身モチーフのように自分をわかりやすく読者に対象化して見せているその構成。題名には工夫が必要。強い動機、こたわる理由があるならば別だが、原則として「？」「！」などの記号を小説に使うのは考えもの。しかし優れた作品であることはまちがいない。淘山の作品も生の緊張感に溢れている。

同様若い世代の多い「文芸同人長崎の会」では4号の秋田しんのすけ「喪中神輿」がおもしろい。コミュニケーションにおける祭りの原点とは何か、を考えさせられる作品。

「科野作家」23号の由比圭司「鏡の中の風景画」は、一九七〇年ころの学生運動のなかの男女の話を描いた。私たちはあの運動をとおしてなにをリレーできたのか、考えさせられた。評論の小沢正男「或る一つの『行人』試論」は漱石論で力作。

「視点」72号では、浜田雄治の「コマチ」が連載の七回を終え最終回。原始のムラにタイムスリップした若い女性の話だったが、筆の運びに迫力があり、さすがに二〇〇五年「オール読物新人賞」を受賞したことだけはある。

「海峽派」117号の中元大介「伝説 沈んだ島」は、慶長年間（一五九〇年代）に豊後国を襲った自然災害を描いた。伝説にふさわしく語りの口調でテンポがよい。

充実した小説が多い「文藝軌道」10月号、なかでも大矢秀樹「球場にて」が心に残る。妻が泊まりででかけたときに、姉から中学生の娘を一泊預かってほしいと頼まれた三十代と思われる主人公の戸惑いを描く。身内や家族のなかのささいなすれ違いを肯定的に描いている。作者の今後に期待したい。

「詩と眞實」725号角田真由美「赤い爪」は、出会い系サイトで知り合った既婚者同士の不倫を描く。女は息子を捨て離婚するが、男は逃げ出す。その男を追って世界のすべてを敵にまわしながら女の情熱はストーリーカーのように燃え広がるばかりである。女の心理描写が巧みで秀逸。人間の心の深淺の不可思議に迫る、文学本来の姿を示す作品。

「海」80号（四日中市）では、小久保修「猿の見る夢」、遠藤昭己「猫洞」に惹かれた。小久保作品は、五十歳代の鬱病で休職中の教師が見る夢。昨年末から話題の伊坂幸太郎「S OSの猿」を想起させる。遠藤作品は五十年前の少年時代、電気店だった主人公の家に短期間住み込みで働いていた年上の女性の消息を訪ねる話。二つとも読後に余韻が残る。

「蒼空」14号の米沢朝子「点景の旅人」は、四十歳代後半の女性が主人公。夫は単身赴任のまま連絡が途絶え六年が経ち、女性はコールセンターで働いている。ある夜中年の男と知り合い一夜をともし、翌日は仕事を休んで男と街をさまよい、女の家までたどり着く。男には仕事の金、一千万円を横領してきた気配が漂う。一夜の描写や翌日街をさまよ

うシーンが上手。サスペンス性も含みストーリー展開も巧み。ただ話が少し長く、すつきりと削れば商業誌でも活躍できる才能である。

「鉄道林」49号、柴田耕平「車掌長の終着駅」はJRで働く職員の話。「職場もの」の素材で専門職に従事している登場人物はとても興味深い。

同様「職場」を素材にした「野田文学」10号、富樫洋「勘違い」は建設関連資材の会社の若い営業担当者の視点で仕事の世界の酷薄さと滑稽さを描いている。リアリティがあり筆力もある。回顧譚ではない迫力もある。同誌には森本房子「戦争中の文学者たち」、古賀悦夫「島尾敏雄『出発は遂に訪れず』論」の二つの評論が優れており、地道な活動に敬意を表する。

「AMAZON」438号、むつぐ都真子「われらの時代」は同人雑誌の合評会に参加する男性の話。同人会自体を素材にして書く発想がおもしろい。

「顔」68号山崎文男「魔境に」は弟の嫁に恋情を抱く五十歳代の男性の話で、ユーモアを感じとるような明るさが魅力。

「小説と詩と評論」329号では、雨宮湘介「蛍橋」、畠山拓「桜桃譚」、美倉健治「ぼったくり犬猫病院」、川島徹「とんぼ」が目立った。字数の関係で二作のみ。畠山作品は、病院で検査を終え医師に酒を控えるように指示された男が、不快な気分になり蕎麦屋に入りさっそくビールを飲む。中年男と少女の親子連れの客を見ながら、田中英光や太宰治、そして自分の過去に思いを馳せる。短くまとまり、田中英光の「なるべくならいつも酔っていたい」との引用したフレーズが効いている。美倉作品は文章のリズムがともよい。職人のたたみかけるような口調が生き、私たちが学ぶべきは、そのテンポ、リズムである。

いつも濃い作品満載の「構想」、47号では、陽羅義光「雁木坂」が秀逸。還暦を過ぎた「わたし」が、四十代のころを思いだし坂に託しながら自分の来し方を回想する話。作者の特徴である語りのリズムと、決して主人公の内面を描写しない韜晦が効果的。作者の最近の作品のなかで光る極北の作品。藤田愛子「妄想同盟」はシリーズで、登場人物も同じマンションに居住する高齢の女性と市役所の介護保険課の四十代男性。女性の「妄想」が愉快である。作者は「おもしろくてやがて悲しき…」の文学の妙味を心得ている。以前の「横須賀線」、「映画館」同様、回顧ではなく「現在」に挑戦する姿に敬服。同誌では長篇、嶋田貴美子「石の門のある家」も始まり楽しみ。

「じゅん文学」は61号の千田よう子「幻想の街」は、宅配便の配送で働く主婦が主人公。夫は脳梗塞で倒れて体が不自由である。彼女は配達先の女主人と友だちになり、深みにはまっていく。ストーリーが明解でテンポよく謎もあり、優れた作品。主人公の心理や内面をさらにえぐれば完璧。同誌62号では、息子と母の二つの視点で構成されている丹羽加奈子「川辺に立つ」が派遣労働で働く若者の鬱屈を描いて出色の出来栄え。長谷譲「マリアをさがして」は、第二次対戦時のナチスが開発しようとした原爆の存在をめぐる日本人技術将校の話で、題材に興味を惹かれた。同誌もよい作品が並んでいて期待大。

「素粒」7号、白川莊子「ゆかりの煩悶」は女子高生が主人公。女子校へ進学し、新しい環境での男性教師や同級生との間で揺れ動く心理と葛藤を描く。思春期の心理をみごとにとらえている。

「時空」31号は、エッセイの篠原敦子「『その夏、乳房を切る』を自費出版して」が、最新出版業界をめぐる話題を書きながらも、自分の立ち位置をしっかりと定めたエッセイ

ですぐれている。

「季刊作家」69号では津田一孝「満月の夜」が力作。職場の部下である男が、結婚を前にして私に話を聞いてほしい、と言う。その話とは巨大な蛾の恐怖物語だった。蛾とは何を象徴しているのか。その意味の解説を読者は迫られることになる。

「人間像」179号も力作ぞろいだが、北村くにこ「海岸町シュガーストーリー」を挙げたい。九十歳の女性が家出をして、自分の生まれ育った町を訪ね、自分の一家の歴史をたどる話。テンポがよくイメージが明るく、作者の感性が光る。同誌の根保孝栄の「同人雑誌評」も楽しみ。

「季刊遠近」38号、難波田節子「遺産の周辺」、定年を過ぎても働く独身女性が主人公。ある日、幼いころ別れた実父の遺産相続を知らせる手紙が届く。奔放な母、そして台湾。

悲惨な過去へ主人公の思いは向かう。母との葛藤と主人公のアイデンティティを問う作品。

「たまゆら」76号、佐々木国広「樹海」は表層では男女の愛欲をミステリ調に描くが、象徴されている絵に意味がある。さらにシンプルに書くことがキーポイントかもしれない。

「メタセコイア」6号の玉城明子「海の記憶」は、終戦の沖縄で六歳の少女が初めて米兵に出会ってその後沖縄で生きていく話が叙情的に描かれている。

「半獣神」88号は、竜崎攻「赤神と黒神」が古代のファンタジーノベルでももしろい。さすがプロである。

「銚子文学」34号では、永澤滉「霧」は、缶詰工場の実験人夫婦が何者かに殺害され、犯人はすぐに逮捕されたが、手引きした共犯者として第一通報者の男が捕まった。その男の事件の背後にある心の闇に迫ろうとする意欲的な作品。

「江別文学」、73、74号合併号の末岡登「一野ふたり」は昭和四十年代、二十五歳の青年が主人公。ある女性にプロポーズするが女性は事故死、彼女には秘密があった。その秘密とは、樺太から引き上げてきたときの船の中での出来事だった。上手な書き手で読ませるが、いまなぜ戦争の影か、という問いかけを発してほしい。

「九州文学」530号は、山下濶子「赤い花」と波佐間義之「ある男の軌跡」が光っている。ストーリーカーのような男の高齢者につきまとわれる家庭の主婦の恐怖を描いた「赤い花」、八十代になる男性ホームレスの人生を描いた「ある男の軌跡」、両篇とも小説の妙味を感じさせる。同誌も毎号優秀な作品を送り出しているので、注目に値する。

「文学街」269号の掌篇、原石寛「侘びしき凱歌」は、肺を患い結婚後、女性に生活の面倒をみてもらう男の悲哀を描く。弱き者の悲哀、孤独、怨嗟、そして諦観が見事。

前号の「全作家」76号では、広島の原爆被爆者の男の人生を描いた大川龍次「雪降る村で」が心を打つ。昨年、歌手でNHK大河ドラマの主役、福山雅治が自身長崎の被爆2世であることを告白したが、差別や偏見、体の不調などを抱えて、生きる被爆者の人たちにこそ、前述の精神のリレーを書いてほしい。

そのほかに作者や作品名を列挙できないが、気になった同人誌を記しておく。「米子文学」56号、「海」69号（太宰府市）、「新人」49号、「四人」84号、「習志野ペン」86号と87号、「碑」93号、「柵」274号、「北方人」13号、「いわき文学」24号、「宇宙詩人」11号、「獣神」33号、「雪溪文学」59号、「風」82号、「codal」4号、「みずかがみ」5号。「北斗」、「季節風」107号、「河」152号、「暖流」13号、「文芸東北」。

ベスト6は米沢朝子「点景の旅人」、角田真由美「赤い爪」、陽羅義光「雁木坂」、千田よ

う子「幻想の街」、丹羽加奈子「川辺に立つ」、塚田遼「大人になるってどういうこと？」。

これらの作品はいずれも長所短所があり横一線。相対評価だが、かつて本欄で取り上げた作品のなかでも充実した小説群である。プロの竜崎攻、文芸誌受賞作家の浜田雄治は除外。

本稿をかいているときに、サリンジャーの訃報を聞いた。「キャッチャー・イン・ザ・ライ」は永遠の青春物語。時の流れを逆手にとって、いつも瞬間を大切に生きたい。それが私の自戒である。

筆者プロフィール..

文芸評論家、放送作家、NHK学園自分史講座講師。現在時事通信、北海道新聞、東京新聞で書評を担当。テレビでは愛川欽也、武田鉄矢、中西哲生、香坂みゆきなどのレギュラー番組の企画・構成、台本作を担当。人気番組「愛川欽也バックインジャーナル」ではコメンテーターとしてもレギュラー出演中。ラジオでは東京FM「クロノス」で、文学や読書に関するトークを展開中。著書「村上春樹とドストエーフスキイ」「新宿小説論」ほか、共著「立松和平 ドロップアウト」「立松和平 文学の修羅として」ほか。